

寸又峽籠城

一九六八年二月二〇日の夜、静岡県清水市のキャバレーでライフル銃による発砲事件があり、暴力団風の二人の男が殺害された。発砲した男は直ちにその場から逃走し、凍てついた山道を大変なスピードで車をとばしていくつもの温泉宿のある寸又峽まで行くと、集落の突端に位置する「ふじみ屋旅館」に入り込んだ。そして報道によれば、主人と宿泊客を「人質」にし、コンロに火をおこしてそばに何本ものダイナマイトを積み、いつでも爆発可能な状態を作ったうえで、清水警察に電話して自分の居場所を明らかにした。そして日本の警察とくに清水警察の小泉勇という刑事に、在日朝鮮人である自分に対する態度を謝罪せよと求め、また殺害された二人は暴力団員で、トラブルの原因が彼らにあることを公表せよと要求したという。この事件は二二日の朝からテレビとラジオで報じられ、日本中が固唾を呑んでその成り行きを見守った。

迂闊にも私は初めこの事件を知らなかった。脱走兵援助組織の「イントレビッド四人の会」の仕事に追われていただけでなく、三月末から一年間フランスでの研究滞在が決まっていた、その準備に忙殺されていたためだ。しかも現天皇の成婚バレード（一九五九年）と東京オリン

ピック（一九六四年）で一躍普及したテレビさえ、当時はまだ自宅に備えていなかった。私に事件を最初に知らせたのは、二月二二日の朝早くかかってきた中国研究者の中嶋嶺雄からの電話である。

中嶋と知りあったのは六〇年安保の直後で、清水幾太郎を中心とする「現代思想研究会」の会合に私が一度だけ出席したときだった。これは後の「未来学者」香山健一らが組織した集団だが、その多くのメンバーが早々と転向して行ったことは周知の通りである。

中嶋は、「人質」と言われた人々の安否を気遣っていた。小松川事件をめぐる私の仕事やサルトルにかんする著書なども読んでいた彼は、「ふじみ屋」にたてこもった朝鮮人の主張は日頃私の指摘していることに通じるから、たとえばその直前に小松川事件を映画化した『絞死刑』（一九六八年）を発表したばかりの大島渚などとともに、私が寸又峽に出かけて行って「人質」の解放を呼びかけてはどうか、そのために知り合いのテレビ関係者に、私のところへ連絡するように伝えた、と言うのだった。そこで初めて私は溜まっていた新聞を読み、ラジオを聴いて、事件の概要を知ったのである。

警察であれ一般人であれ、日本人の差別意識は国の至るところに深く浸透しており、珍しいことでもなんでもない。それをこのように正面から暴力的な形で難詰する者があらわれること

も、想像の暴力という形をとった李^イ珍^{ジン}宇の犯罪を考えてきた私にはけっして意外でなかった。だから私の最初の印象は、小松川事件を通してずっと追究してきた問題が、いま現に起こっている、というものだった。ただ小松川事件の場合は李珍宇がすでに亡いのをよいことに、私は自分の身を安全なところにおいたまま彼の内面を探っていたのだが、この朝鮮人は生きた存在で、しかも報道によれば、やがて自ら生命を絶つとさえ言明していた。私は自分の思った通りの事態がこのような形で現実化したことにうろたえた。しかし私などが出かけて行ってしまうものでもないし、テレビ局から連絡されるのも避けたかった。そこで私はその旨を中嶋に伝え、その日は午前中から家を空けて、一日中外出していた。案の定、私の留守中に、家には何度もテレビ局から電話があったという。

私が見た限りでマスコミは、「人質」と呼ばれた人たちの生命が脅かされていることを強調していた。しかし私には、日本人であるというだけで、私たちはいつ何時でも同じように「人質」にされ得るのではないかと思われた。彼らはいわば私の身代わりである。私は「ふじみ屋」にいる自分を想像した。ある日、一人の男が銃とダイナマイトをかかえて、境界の向こうからいきなり自分の泊まっている部屋にぬっと入って来たら、私ならどうするだろう。ことによると恐怖にかられて逃げ場を求めるかもしれない。しかしそれが不可能だと分かったときに、

あらためてこの人物の言葉に耳を傾けようとつとめるのではないか。そんなふうに私は考えた。

それと同時に私には、マスコミによって「ライフル魔」と呼ばれた「金岡安弘こと金^{キム}嬉^ヒ老」という人物の運命が気かりだった。この「こと」という表現は、李珍宇の問題でふれたように、それだけですでに雄弁に、その人物がこれまでおかれてきた状況を示している。しかし、武器が一挺のライフル銃と数十本のダイナマイトにすぎない以上、彼に残されているのが自決でなければ逮捕であるのは明らかだった。つまり彼の敗北は既定の事実であり、私には考えたくない結末が予想された。

こんなふうに寸又峽の状況を想像しながら、事件から逃亡するように過ごした一日が暮れたが、その夜はたまたま脱走兵閥連の用事で、「ベ平連」の古山洋三を訪れる約束になっていた。彼は私の中学の二年後輩で、高校の社会科の教師だった。後に五九歳の若さで急逝するのだが、堅固な信念の持ち主で、一貫して平和運動、反戦運動、労働運動に取り組んだ人物である。私はどっしりと構えて冷静な判断を下す彼を信用して、脱走兵の問題ではよく一緒に行動したのもだった。

高円寺にある彼の家に着いたのは、すでに夜かなりおそい時刻だった。ところがそこへ独文

学者の伊藤成彦から電話がかかってきたのである。伊藤は中央大学の教員で、私とはすでに仕事上のことと何度か会っていた。また古山洋三夫人の和泉あきと彼は、いずれも小田切秀雄に近い文学グループの同人だった。その電話で私のことが話題になったらしい。古山が「鈴木さんならちょうど今ここにいるよ」と答え、私は電話口につ張り出される羽目になった。伊藤は、寸又峡の事件について話し合うために、いま銀座の東急ホテルに一群の人が集まっており、中嶋嶺雄も来ている、ついでには是非私にも議論に参加してほしい、と言う。こうなってはもはや逃げるわけにいかない。私は重い気持ちで、深夜の東急ホテルに向かった。着いたのは零時をとうにまわって、午前一時か、あるいはもっとおそい時刻だったかもしれない。こうして心ならずも、私の「金婚老事件」が始まったのである。

ホテルの広い部屋に集まっていたのは、中嶋と伊藤の他に、国民文化会議の大沢真一郎、作家の金達寿、数人の大学教員（法政大学の西田勝、福島大学の吉原泰助、東大の横山正彦）、三人の弁護士（斉藤浩二、角南俊輔、山根二郎）、名前は紹介されなかったが二人の朝鮮人と、TBSの記者二人だった。金婚老はその日（二月三日）の正午までと刻限を切って警察の回答を求めており、その時刻を過ぎれば彼にも「人質」の身にも何が起るか分からなかったから、私たちのいるホテルのその部屋にも緊張がみなぎっていた。

「呼びかけ」

重苦しい議論は午前二時頃から始まったが、明け方近くになって、この局面を打開するため金婚老に「呼びかけ」を行うことが提案された。私は、もし「呼びかけ」をするにしても、生きのびてくれと言うのは自首し逮捕を勧めるにも等しいから、彼の生死については何も言うべきでない、むしろ、仮に彼が死んでもわれわれは彼の主張を生かすべくつとめるし、万一逮捕されて裁判になった場合は法廷で彼を支える用意があることを伝えるべきだ、と主張した。それは大筋でみなに了承され、「呼びかけ」原案の起草が私に依頼された。私は中嶋と相談しながら大急ぎで文案を作成したが、それは全員によって検討され、大幅に修正をほどこされて、結局最後に承認されたものは次のような文章だった。

「あなたの声は私たちのところに届きました。私たち（文学者、大学教師、弁護士、ジャーナリスト）は、事件の詳細について深く知りたいと思いますが、このような形で届けられたあなたの声の持つ重大な意味を、いま夜を徹して考えつづけています。

私たちは本日正午までと刻限を切られたあなたに、私たちの精一杯の声を送りたいと思い